

本質探究と日常に寄り添うこと

中森 康之

一
ウイリアム・メレル・ヴォーリズという建築家がいる。折しも昨年、ヴォーリズ没後五〇周年にあたり、彼が暮らした近江八幡市では、町をあげ、一ヶ月にわたって記念イベント「ヴォーリズメモリアル五〇 in 近江八幡」が開催された。それ以前からも全国各地でヴォーリズ建築の保存再生活動が行われるなど、ここ数年、「ヴォーリズ建築」はちょっとしたブームとなっている。

ヴォーリズ建築のファンは、建築の専門家もいれば、そうでない人もいるが、そうでない人、つまり素人ファンが非常に多い。彼（女）らは、「建築」のファンではなく、「ヴォーリズ建築」のファンなのである。

彼（女）らの多くが口を揃えるのが、「ヴォーリズ建築は住む人にやさしい」、「ヴォーリズ建築はどこか懐かしい感じがする」、「ヴォーリズ建築はどこも同じ匂いがする」、「ヴォーリズ建築の中で過ごしていると優しくなれる」、「ヴォーリズ建築ではつい長居をしてしまう」等々といった感想である。かくいう私もここ数年、すっかりヴォーリズにはまっております、同様の感想を抱いている。

建築にさしたる興味がなかった人を虜にするヴォーリズ建築とは一体何なのか。ヴォーリズ建築の何が人々をひきつけるのか。

私はその理由を、ヴォーリズが、日常に寄り添いつつ本質を大切にされた素人建築家だったからだと考えている。ヴォーリズは、人間存在の本

質、空間の本質、建築の本質に絶えず配慮しながら設計した。それが出来たのは、ヴォーリズが専門教育を受けていない素人建築家だったからである。

二

ヴォーリズは一八八〇年アメリカで生まれた。建築家を志し、マサチューセッツ工科大学への進学も決まっていたが、コロラドカレッジ在学中に参加した海外伝道学生奉仕団 (Student Volunteer Movement for Foreign Mission) の第四回世界大会 (於・カナダ、トロント) で、霊的体験をする。目の前で演説をしていたテイラー夫人の顔がわかにキリストの顔になり、「お前はどうかするか？」という神の声が聞こえてきたというのである。それまで、大学卒業後に神学校に行つて宣教師になるか、あるいは建築家となって海外に伝道にでる宣教師たちを経済的に支援することを考えていたヴォーリズは、この霊的体験によって、神学校を経ないで、すぐにでも自らが海外伝道に出る決心をする。このときヴォーリズは建築家になる夢を捨て、カレッジのコースも哲学科に変更したのである。

コロラドカレッジ卒業後間もなくの一九〇五年、ヴォーリズは滋賀県近江八幡に英語教師として来日した。滋賀県立商業学校などで英語を教えながら、放課後に自宅でバイブルクラスを開き、生徒に聖書を講じた。これがあまりにも人気を博し過ぎたため、危機感をもった保護者や地域住民の反感をかい、二年後契約を更新してもらえないという事態に陥った。

しかしそんな危機の中で、ヴォーリズは八幡基督青年会館を設計し、翌年にはヴォーリズ建築事務所を開設した。一度は諦めた建築家となつ

たのである。そして、教会、大学、病院、住宅等を次々に設計していった。その数は千件を超える。昨年十二棟一括で国の重要文化財指定の答申が出された神戸女学院大学もヴォーリズ建築である。

三

ヴォーリズが設計した建物は、なぜ一般の人を惹きつけるのか。先に述べたように、ヴォーリズがその建物が立つ空間の意味、その建物の中で過ごす人間の存在本質をよく探究し、それに最もふさわしい空間を創造しようとしていたからだと思はう。

建築はその建物の種類がいかなるものであっても、設計の本質はなんら変わらないのです。何のためにその建物が存在するのか、誰のために必要な建築であるかを考えることによつて、私は医師にもなり、商人にも、職人も、いや鳥にだってなることができると思つています。

ここで「何のために」「誰のために」というのは、決してその建物の機能を言っているのではない。ヴォーリズが設計にあたって大切に「設計の本質」とは、その建物がどういう場所に建ち、その中で誰がどのような時間を過ごし、どのような経験をするのか、その経験がその人にとってどのような意味や価値があるのか、それに最もふさわしい空間とはどのようなものか、ということである。

例えばヴォーリズは、「住宅の設計をする場合には、肉体的健康、精神力、霊的状态等、あらゆる方面から生活の全範に亘つて学んで居なければならぬ」（「神戸女学院新校舎建築の要素——設計者の言葉——」

『めぐみ』一九三三年七月）と述べているし、あるいは学校であれば、「学校の設計をするに当つては、教育の全科に亘つて研究しなければならぬ」（同）とした上で、次のように述べている。

校舎が生徒の精神経験に及ぼす影響と言ふものを信じないならば、学校建築の設計は、それが如何様に大きく、又立派であらうとも非常に興味の少ないものである。（略）もしもこの建築が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する事であればならない。而してその結果は、今後益々日本国中に打ち建てゆかるべき家庭の上に頭れてゆく事であらう。而してその家庭の室内装飾をみればそれが神戸女学院の同窓生であると言ひ得る様になるべきである。（略）吾々は、生徒方が此等の建物を単に雨露を凌ぐ場所として、或は仕事場として用ふるのみならず、その中から直接に教育価値を見いだされん事を希望するのである。

校舎はただの雨露を凌ぐための建物ではない。そこが教育の場である限り、そこにはそれに相応しい空間が創造されていなければならない。さらにはその校舎が、その中で生きていく生徒の精神、霊的感受性による影響を与えるものでなければならぬ。その結果、例えば室内装飾を見れば、そこが神戸女学院の卒業生の家であることが一目瞭然になるはずである。ヴォーリズはそう言っているのである。

このことを自身が長年神戸女学院大学に勤めた内田樹は、「ヴォーリズ建築は建築物そのものが学びの比喻になっている」と指摘している。

ビジネスマインドな人々にはこの学舎の価値は見えにくい。けれども、それはこの建物を生活の場として、そこで研究と教育の日々を送っているとゆつくりと身にしみてくる。(略)教育を功利的な語法で語る人は、教育の価値はそれが子どもたちにとっての利益をもたらすかによって考量されると信じている。(略)彼らの考えとはうらはらに、学びというのは、学び始める前にその意味や有用性が一覽的に開示されることで動機づけられるものではない。

私たち自身が経験的に熟知しているように、私たちの学びへの意欲がもつとも亢進するのは、「これから学ぶことの意味や価値がよくわからない」のだが、「それにもかかわらずはげしくそれに惹きつけられる」状況においてである。

ヴォーリズの「仕掛け」は「その扉を自分の手で押してみないと、その先の風景はわからない」という原理に貫かれている。

だから、あちこちに意味の知れないへこみがあり、隠し階段があり、隠し扉がある。(略)

扉の前に扉の向こうに何があるか、自分が進む廊下の先に何があるのか、それを学生たちは事前には開示されていない。自分の判断で、自分の手でドアノブを押し回したものに扉の向こうに踏み込む権利が生じる。どの扉の前に立つべきなのか。それについての一覽的な情報は開示されない。それは自分で選ばなければならない。「学びの比喩」というのはそのような意味を指している。

ヴォーリズ建築がそのようにメタフォリカルなものであることを学び知るまでに私は二十年近い歳月を要した。学舎そのものが

そこで生きる人々に人間的成熟を要求するような建物というもの
が存在するということを知るまでに、私にはそれだけの時間が
必要だったのである。(『Veritas』 No.42, 2009.12.21)

内田は、ヴォーリズ設計の校舎には、隠し階段や隠し扉といった、それに気付き、興味をもち、自らの手でそれを開けたものだけが、事前には開示されていなかったあるものを得ることができるよう仕掛けがあり、その仕掛けを自らの身体でもって経験することの本質は、人が何かを学ぶということの本質と同じだ、というのである。

キャンパスの中で、校舎の中で、学生や教職員たちは学ぶ。その学ぶという経験が、その校舎の中で過ごすことによって、身体的に追体験出来るようにヴォーリズの校舎は設計されている。あるいは逆に、その校舎の中で日常的に時間を過ごすことによって、学ぶとはどういうことかという学びの本質に対する感受性が涵養されるように、ヴォーリズは設計していたのであった。

四

ではヴォーリズは、なぜそのような空間を創造することができたのだろうか。先に述べたように、私はヴォーリズが、建築の専門教育を受けていない素人建築家だったからだと考えているのである。ただし、ここで「素人」というのは、単に専門教育を受けていないことだけを意味するのではない。ヴォーリズ建築の根底にあるのは、いわば「精神としての素人」なのである。

ヴォーリズは常々「素人がこんな設計やらせてもらえて、ありがたいこっちゃ」と口にしていたというが、ヴォーリズはこの「精神としての

素人」ということに、かなり積極的な意味を見出し出していた。というのもヴォーリズの本来的目的であるキリスト教伝道においても、彼は素人として来日し、それを貫いたからである。

トロントでの霊的体験のあと、ヴォーリズはそのまま英語教師として来日するが、このときヴォーリズにはもう一つの選択肢があった。それは、神学校で専門教育を受けた上で、宣教師として海外伝道をするという道である。ヴォーリズ自身、次のように述べている。

最初私は、将来いわゆる「宣教師」となるための準備として、大学卒業後、神学校の課程を修めることが必要であろうと考えていた。しかし、(略)私に与えられた使命は、むしろ種々な職業を通じて、人間生活基準となるような、キリスト教的生活の徹底的な実践にあるということが、明らかになってきた。(『失敗者の自叙伝』)

ここにはヴォーリズが学生時代から積極的に参加していたYMCA活動とその理念の影響があると言われているが、それはともかく、ヴォーリズが自覚的に宣教師ではなく素人伝道者(これをLayman(レーマン・平信徒)という)を選択したことが分かる。それには次のような理由があった。

時には素人伝道が却って専門家の先生達より、有利な立場にあることがある。(同)

ヴォーリズは、プロの宣教師や牧師ではない素人伝道者(レーマン)

にしか出来ないことがあり、自分の使命はそちらにある、と考えていたのである。ここでヴォーリズの念頭にある素人伝道とは、人々の日常生活に寄り添いながら、自分もその中の一生活者として人々と同じ感覚で生きながら伝道するということである。彼が作った近江兄弟社では、会社での仕事を含む日常の営みそのものが、キリスト教の教えの実践なのであった。その中でヴォーリズは、日常生活とともに生き、協働して同じ生活基準を作り上げてゆこうとしたのである。

ヴォーリズは建築家としてだけでなく、実業家(近江兄弟社等の設立、メンソレータムの販売など)、キリスト教伝道者、詩人など、多様な才能を発揮したが、いずれにも「精神としての素人」が行きわたっていた。例えば、ヴォーリズの死後、友人の編纂により、『*Poems of the East and West*』が刊行されている。その冒頭に置かれた詩は“AMATEUR POET”、「素人詩人」という詩である。

韻を仕上げるために

一晚中灯りをともし続けるようなことを私はしない。

メタファー(隠喩)を作り上げるために、

早起きするようなことを私はしない。

私の足は、規則によって決められた道を歩まず、

私の魂は、古典的な飾り文句を忌み嫌う。

実際、私は、詩を走り書きする。

あたかも、名誉のためではなく、

楽しみのために口笛を吹く少年のように。

ヴォーリズにとって詩とは、日常生活において、見たまま感じたまま

を即興で「口笛を吹く少年のように」言葉を紡ぐ行為なのであった。念のために申し添えると、ヴォーリズは詩作の規則を熟知しており、韻も正しく踏むことができた。何度も言うように、ヴォーリズがここで述べているのは、「精神としての素人」なのである。

五

ヴォーリズは、素人であり続けることによって、日常生活の中に留まり、普通の人の、普通の感覚に寄り添いながらキリスト教を伝道し、建物を設計し、英文の詩を書いた。ヴォーリズは素人であり続けることによって、深く自分自身に問いかけ、日常を生きる普通の人たちの普通の感覚に触れることができたのである。

ヴォーリズ設計の校舎には、一学生だった頃のヴォーリズ自身の学びの経験とその意味が深く込められている。ヴォーリズにとって建物の本質は、徹底的に日常生活に寄り添い、日常生活の感覚によって自分自身の中からしか取り出すことができないものであった。だからこそ、私たちがヴォーリズ建築に触れたとき、自分が何のためにここにおいて、自分はここで何をすべきか、自分は何者であるのか、つまり自分の存在意味（本質）を建物自体がつけ知らせてくれるのである。

ヴォーリズ建築の中で、ひとは自分自身に出会う。そして自分は自分としてここにおいてもいいのだと深く自分を肯定することができる。その経験がある人は「ヴォーリズ建築はどこか懐かしい感じがする」と言い、またある人は「ヴォーリズ建築の中で過ごしていると優しくなれる」といい、だからこそ「ヴォーリズ建築ではつい長居をしてしまう」というのである。

六

さて本誌『本質学研究』では、様々な書き手によって、日常生活に寄り添いながら、それぞれの仕方で「本質」が取り出されることになるだろう。それは、書き手が深いところで自分に出会う場所であると同時に、読者をも自分自身に出会わせてくれる空間となるはずである。